

Ⅳ 総合的考察及び課題

我々はこれまでの3年間、児童生徒の成長・発達をコミュニケーション面に視点を当てて考え、実践を積み上げてきた。この研究実践の成果について、まず「授業づくりの観点」という視点から述べてみる。

長年にわたり指導されてきた単元や題材には、コミュニケーションに関する指導が随所にしかも効果的にちりばめられていることがわかってきた。このような間接的なコミュニケーションに関する指導は、直接コミュニケーション指導をねらった授業に比べ、より生きた力になりやすいということがわかった。これは、児童生徒に応じた課題を年間を通して指導したり、毎年少しずつ発展させて身につけさせたりできるために、定着しやすかったり般化しやすかったりしたものとする。具体的には、小学部では、コミュニケーションに関する意図を持って教師がともに遊びながら学習を展開していった。中学部では、コミュニケーションを切り口と考えたことにより、より効果的な運用がなされるようになった。高等部では、人や社会との関わりを大切にし校外での学習を多くするなどコミュニケーションを大切にした単元や題材を取り入れていったことで生活力が高まっていった。コミュニケーションの力を高めるのに効果的であった単元や題材の設定及びその配置は、よい題材と適切な運用が一体化したときであった。

指導者の関わり方については、児童生徒からの反応を引き出すために教師は待つことも重要であることがわかった。しかし、待つのみではなく、経験や場や時間を考慮した上でのおいこみも必要であった。また、小学部では児童の意図をくみ取り、中学部では生徒の仲間として一緒に考え、高等部では社会を意識して大人として対応する教師の姿勢も大切であった。さらに、補助的指導者（サブ）の役割がいかに重要かが明確になった。発達年令が低い児童生徒ほど補助的指導者は、児童生徒の思いやつぶやきを全体のものとしたり、指導者（チーフ）の指示や発言をわかるように伝えたりする配慮を要した。

また、個を生かす指導の工夫については、次のようなことがわかった。①異なった集団の中で活動の意欲がよりかきたてられた。学年別、縦割り、ねらいにあわせた小集団、時には1対1の個別というような工夫をする必要があった。②一斉指導場面において、個を生かすためにも、前述した補助的指導者の役割が重要であった。中学部、高等部では生徒が補助的指導者の役割を担うこともあった。③個に応じた指導形態については、場や時に応じて同一教材複数課題、個に応じた教材教具の工夫がなされた。

次に、児童生徒の変容と成果について述べる。人との関わりという具体的な数値には表れにくい部分で、以前にまして笑顔で積極的に人と関わる児童生徒の姿がみられた。段階別教育内容表による評価では、「表現化」よりも「社会化」「職業化」の伸びがみられる児童生徒が多い傾向があらわれた。言語能力を高めたいと始めた研究であるが、言語や理解面で特に顕著な伸びがあったとはいえない。

い。しかし、対人関係などの社会性を中心とした総合的な伸びが、コミュニケーションの力を高め、結果として言語能力も引き上げつつあると考える。コミュニケーションに視点をあてた取り組みによって、段階別教育内容表の全体的な発達の伸びがみられたことは我々の最も望む結果であった。

さらに、自分づくりについて述べる。本校のコミュニケーションの研究の一つの特色である「もう一人の自分との対話ややりとりをする」という視点によって人格形成が図られたことは大きな意義があった。自我、自制心、自己客観視という流れがわかり、何を具体的に指導し、どう援助すればいいのか明らかになりつつあることは我々にとって大きな収穫であった。そして、児童生徒自身に「自分」の望ましい姿が見え始め、自分をよくする方向で物事に取り組むようになり、社会参加の幅が徐々に広がり、社会的自立に向けて前進がみられつつある。

本年度でこの研究を一応しめくくるにあたり、今後の課題について次のように考える。

コミュニケーションに関しては、児童生徒の聞く力を高めることはなかなか容易でなかった。今後も認知能力の裏打ちをしながら、聞く力を高めていきたい。コミュニケーションの相手となる大人が変わることで児童生徒も変わることを学んだ。今後も、教師としての力量をさらに高めていきたい。

コミュニケーションに関する資料のみならず、研究によって積み上げられた資料が整いつつある。たとえば「自分づくり」や「性教育」の取り組みが進みつつあり、段階別教育内容表（巻末参照）にこの軸を入れて充実させることにより、さらに社会的自立が図られるのではなかろうか。

この度のコミュニケーションの研究で得たことを大切にして、一人ひとりの児童生徒にあわせた教育をさらに考えていきたい。

（文責 岡村 清）